と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。2前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

日本国憲法第2章戦争の放棄第9条日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争

東久留米「九条の会」9周年のつどい

—古田足日さん（代表）・佐野正利さん（副代表）の志を受けついで—

お話と落語　古今亭菊千代さん

「平和でなければ落語は笑ってもらえない」

「またもや９条の危機が来ているようなので、９条羽織を脱ぐことができません。」「9」の字の紋付で世界を行脚する落語家、古今亭菊千代さん。お話と落語を大いに楽しみながら、憲法9条への思いを共にしましょう。

古今亭菊千代さん

オープニング

二胡演奏

三浦るい さん

松元ヒロさんからメッセージ

東久留米「九条の会」に、いよいよ、満を持して古今亭菊千代師匠の登場！おめでとうございます。「憲法を守れ」「原発反対」「戦争反対」とハッキリとおっしゃる師匠。こんな落語家は他にいません。ピースボートに欠かせない水先案内人（ゲスト）としても有名な「平和の使者・菊千代師匠」のお話を聴ける東久留米「九条の会」の皆さんは幸せです。

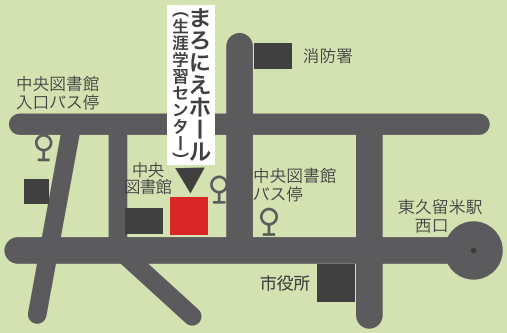
—菊千代師匠が起ち上げて下さった「芸人九条の会」のメンバー、松元ヒロより—

2014年9月6日（土）

14:00 開演（開場 13:30）

まろにえホール

東久留米市立生涯学習センター・ホール



チケット：前売券 800 円（当日券 1000 円）・障がい者・大学生以下無料

取り扱いは　東久留米各地域九条の会・東久留米市市民プラザ・各地域センター・喫茶バオバブ・證文堂滝山店・喫茶アコルデ・蕎麦庵陶然・珈琲焙煎工房ロアン・かくしち・トイ カフェ　他

〈主催・お問い合わせ〉東久留米「九条の会」042-473-9489（鈴木）

メール：higashikurume9@jcom.home.ne.jp　URL：http://members3.jcom.home.ne.jp/higashikurume9/

プロフィール

古今亭菊千代 さん

はい、わたくし古今亭菊千代です。

春夏秋冬も、動物達も、人間も、そして政治もなんだかおかしくなってしまっている今日この頃です。

普通に暮らしていく事がむづかしいこの頃ですが「諦めずに、なるべく楽しく元気に生きる、人生は誰のためでもない自分のためのもの」そう思って、私は大好きな落語と共に、仕事をし、旅を楽しみ、言いたい事を言い、お酒を呑み、歌を唄い、インコと遊び、サンシンを弾き、パソコンと向かい、物を書き、一日に一回は食べたい物を食べ、着物のバーゲンに走り、そして郵便物の切手を貼っています。（古今亭菊千代ホームページより）

1956年7月東京生まれ。桜美林大学文学部卒業。84年に2代目古今亭圓菊門下に入門。93年三遊亭歌る多師と共に女流初の真打に昇進。寄席や独演会等で活躍する一方、古典落語の他に、新作・創作・自作、手話落語、コリアン落語、男女共同参画をテーマとした講演等などを手がける。全国の刑務所、拘置所、少年少女院などの更正施設で落語を披露するなどの社会活動を行なう。NGOピースボートに毎年水先案内人として乗船、船内でのワークショップの他、ブラジル・アルゼンチンなどの日経の方々への落語口演等、寄港地で落語を披露。獅子舞や、玉すだれ、踊りなどの余興を交えるなど肩の凝らない楽しい講演が得意。

三浦るい さん

2002年に日本語教師として赴任していた中国の吉林省長春にて二胡に出会い、その音色の素朴さと繊細さに魅了される。

帰国後、2006年から念願の二胡を習い始め、2011年より日本二胡学院で学院長楊興新に師事。

同年には技術的に高い評価のもと、日本二胡学院認定講師となる。

現在は地元で二胡教室を開室するとともに、その繊細で柔らかい奏法による定期的なミニライブ活動展開中。

6月8日に亡くなられた東久留米「九条の会」代表、古田足日さんの絶筆となった『母のひろば』のために書かれた、平和への願いが込められた文章です。

児童文学、三つの名言　古田足日

（ふるた たるひ／児童文学者）

＊2014年5月15日発行　『母のひろば』（童心社）600号より

安倍政権は二〇〇六年十一月、教育基本法を改悪した。

日本を戦争のできる国にするための巨大な一歩が進められたのだった。問題がふたつ生まれてくるのをぼくは感じた。

ひとつはいうまでもなく、　安倍政権の教育政策の中心には「愛国心教育」があることだ。ぼくはぼくの子ども時代、愛国心教育で育てられたことを、悪夢のように思い出す。そこには精神の自由はなく、国のために命を捨てることを美徳とする教育があった。ぼくはこれからの子どもたちに、この苦痛を味わわせたくない。だが、安倍政権はそれをやろうとしている。

もうひとつの問題は、学校教育にしばられない子どもの本・絵本のあり方である。道徳が教科化され新しい教科書もつくられた。この過程で自民党は「教育の目標」として五項目をあげ、愛国心を中心とするざっと二十の徳目をずらりと並べた。教科化することで、子どもが成績によって評価されるようになる。それは、子どもの心をしばってしまうことになるのではないか。

一方、学校図書館の選書にもその影響は及ぶかもしれない。このような状況下にあって、子どもの本の創り手や、子どもの本の渡し手は、今までよりもっと重要な役割を果たすことになる。

童心社創業五十五周年の本誌の特集で、ぼくは創業者・松村金治の発言をふたつ記した**「わたしは、児童がすぐれた児童図書を手にすることは、全宇宙を自分の手にすることだと思います。」「それは大きな力も持っています。いまわしい戦争を止める力を持っています。」**

また、同じく本誌五百号の巻頭言で、小出省吾さんが児童文学者という仕事について**「軍備なき平和を素手で守り得る人間をペンをもってつくる、次代への先の長い仕事」**と述べていると紹介した。

この三つの言葉をもう一度考え、子どもの本を書く、子どもと共に読む、という活動の本質を深くとらえる必要があるのではないだろうか。